經濟論叢

第九十六巻　第三號

イギリス綿業マニュファクチュアの
企業構造……堀　江　英　一　1

第三のカザノーヴァ(3)……穂　積　文　雄　22

古典派経済学と国際分業論……吉　信　　肅　50

昭和四十年九月

京都大學經濟學會

第三のカザノーヴァ（3）

穂　積　文　雄

Ⅳ

第三のカザノーヴァ，すなわち，われわれのいわゆる経済人としてのカザノーヴァの活躍する舞台はロッテリーのそれである。そのことは，かれにとっては，まことに，好都合である。まさに，ねがったり，かなったりというべきところである。それは魚が水を得たようなものである。それは龍が雲を得たごときものである。そういっても，かならずしも，はなはだしいいいすぎにはならないであろう。わたくしには，すくなくとも，わたくしには，そうおもわれる。けだし，ロッテリーは，もと，ギャンブリングの一種である。しかるに，ギャンブリングこそは，かれカザノーヴァの得意の壇場である。それだからである。わたくしは，さきに，カザノーヴァといえば，ひとは，すぐ，おんなたらしをおもう，といった。かくて，第一のカザノーヴァをおんなたらしの面においてみた[1]。そのことにまちがいはない。しかし，それは，実は，簡明のために，そういったまでのことである。くわしくは，おんなたらしの，ペテン師の，いかさましの，かけごとし，というべきところであったのである。そういうと，それでは，もう，すでに，それだけでも第二・第三・第四のカサノーヴァがみられることになるのではないか。そういうひとがあるかもしれない。しかし，それは，そうではない。すくなくとも，わたくしのみるところでは，それはそうではないのである。わたくしのみるところでは，それらが一体をなすところにあらわれるもの，すなわち第一のカザノーヴァなのである。かれは，「神にそむくもの」と，いわれる。かれは「罪あるもの」と，いわれる。かれは「悪徳の権化」とみられる。それは，われわれの，すでに，みたところのごとくであるが[2]，

1）本稿，1，本誌，96巻1号，1965.
2）同上。

それは，これらの素質をも，ふくめてのことであろう。そう，かんがえるべきであろう。それでこそ，それらの評も，生きてくる。迫力をもつ。よく，わかる。そういってよいであろう。

しかしながら，そういうと，こういうひとがあるかもしれない。それなら，そうと，なぜ，はじめから，そういわないのか。いまごろになって，そういうのは，いかがなものか。つじつまをあわすために，そういうのではないのか。世には「証文の出しおくれ」ということがある。これも，そのたぐいになるのでは，ないか，と。そういわれると，かえすことばにくるしむ。しかしながら，だからといって，事実は事実である。事実なのだからしかたがないではないか。そうこたえることもできようか。しかしながら，わたくしは，かならずしも，そういう応酬をしようとは，おもわない。だから，そういうひとがあるならば，そのいうにまかしてもよい。なんとなれば，わたくしは，おんなたらしという面からだけで，わたくしのはなしをすすめてもよい，からである。それでも，なお，わたくしはわたくしの論旨をつらぬくことができるからである。わたくしには，そうおもわれるからである。と，いうのは，こうだからである。

おんなたらしといっても，それには，いろんなかたがある。みな，おなじとは，かぎらない。

たとえば，「ギリシァ・ローマ時代には，おんなたらしは，こうごうしい，そして，ユーモラスなすがたで，あらわれている。牡牛から黄金の雨にすがたを一変させたジュピターなどは，なんといっても滑稽だった。

キリスト教は大まじめで悪魔を女たらしの親玉にしている。悪魔の誘惑する相手は，老弱を問はず魔法使いの女たちだった。そういえばヴァルピュルギス (Walpurgis) の夜など，悪魔は，一晩の大量征服で，カザノーヴァとドン・ファン (Don Juan) の生涯を合わせた以上の仕事をやってのけている。

その後おんなたらしの容貌は人間的になった。プロヴァンス (Provence) では，トロバドール (troubadour) のように詩的になり，ほかのところでは，ドイツの神秘主義者ファウストのように，あるいは簿記のコンプレックスにとり

つかれたスペインの女性侮蔑者ドン・ファンのように，その容貌は悪魔的になった」[3]。

しかしながら，われわれは，その中に，おのづから，二つの系統をみることができるであろう。そのひとつは女をくいものにするものである。今日，わが国で，ひもとよばれているもののごときは，そのもっとも典型的なものであろう。いまひとつは，逆に，女の歓心を買うものである。そして，カザノーヴァのごときは，まさに，その代表的なものというをはばからぬものであろう。前者は，女をおどして女から金をまき上げる。はなはだしきは，女を売りとばして金にする。後者は，逆に，女に金をみつぐ。みついで，うむことをしらぬ。わが，カザノーヴァは，いまもいったとおり，後者に属する。しかもその代表的なものである。だから——と，いうよりも，その証拠に，というべきでもあろうか——かれは，女の歓心を買うことを，これ，つとめる。せっせと，女に金をみつぐ。みついでうむことをしらぬ。すくなくとも，そうすることを辞するものでない。わたくしは，さきに，かれは，おんなたらしにあけくれる，と，いったが，それは，たいていの場合，女にみつぐことにあけくれる，と，いいなおしても，よいくらいである。すくなくとも，女の歓心を買うのに，日も，これ，たらぬ，と，いいなおしても，よいくらいである。そういっても，かならずしも，いいすぎではない。わたくしには，そうおもわれる。

しかし，そういうと，カザノーヴァは，いかにも，だらしない男であるようにおもわれるでもあろう。だから，ここに一言かれのために弁じておかねばならない。なんとなれば，かれは，けっして，そのようにだらしない男とは，おもわれないからである。それなのに，そうおもわれるようなことになっては，カザノーヴァに対して相済まぬ。それでは，わたくし自身としても，心外である。それだからである。けだし，それでは，わたくしは，カザノーヴァについてあやまったポートレイトをえがくことになる。そして，それは，わたくしの，

3) Hermann Kesten, *Casanova*, Translated by James Stern and Robert Pick from the German original, New York, 1955, p. xii, 小松太郎氏訳「カザノーヴァ」，上巻，（角川文庫版）19-20頁。

もっともなすを欲せざるとこである。それだからである。もっとも，それは第一のカザノーヴァのポートレイトである。いま，ここでえがこうとしているのは，第三のカザノーヴァのポートレイトである。それなら，ここで，それを，それほど，気にやむにも，およばないのではないか。そうなぐさめてくれるひとも，あるいは，ないとはいえないかもしれない。しかし，それでも，それは，なお，わたくしのこころには，しこりをのこす。わたくしは，それをいなみ得ない。だから，わたくしは，やはり，しばらく，ここに，かれのために弁じることを，ゆるしていただきたいのである。

そこで，わたくしは，かれのために弁じる。それは，こうである。わたくしは，かれは，女の歓心を買うことを，これ，つとめる，と，いった。せっせと女に金をみつぐ，と，いった。みついでうむことをしらぬ，と，いった。そうすることにあけくれるかれをみるとも，いった。そうだとすれば，かれは，いかにも，だらしない男のように，おもわれよう。しかしながら，かれの女に対するや，まことに，おのれをむなしうしている。まったく献身的である。金をみつぐにしても，女にだまされて，まきあげられるのとはちがう。みずから，このんで，提供するのである。しかも，その場合，惜し気なく提供する。財布の底をはたいてでも提供する。いじましいところなどみじんもない。みていて胸がすくおもいさえする。そこまで，ゆけば，もうだらしないなどいう感じなどすこしもない。それどころか，なにか，こう，崇高なといったものさえ感じられるくらいである。しかも，ひとり，金にのみかぎらない。名譽でも地位でも投げ出す。投げ出して，いささかもくいるところはない。そういう概さえみえる。「君と寝ようか五千石とろうか，なんの五千石，君と寝よう」という歌がある。あの歌の文句をそのまま地で行くものである。そういってもよいであろう。そういうと，あるいは，ひとはいうかもしれない。そもそも，カザノーヴァに，投げ出すに足るほどの名誉とか地位とかいうものがあったのであろうか，と。しかしながら，およそ，ひとが世に処するにあたっては，たれでも，そのひとなりに，それ相応の，名誉もあれば，地位もあるはずであろう。カザノーヴァ

だって，ひとの児であることにかわりはない。かわりがない以上，それがないはずはあるまい。そうかんがえてよいのではあるまいか。かりに百歩をゆづって，それがなかったとしても，たれでもわが身はかわいいであろう。たれでもいのちはおしいであろう。それは，たれでも，おなじことであろう。それは，名誉とか地位にかかわりはない。それは万人共通の性情である。そういってよいであろう。ところが，カザノーヴァの女に対するや，そこには，それをしも，すててかえりみないという意気というか，気迫というか，そのようなものがうかがわれるのである。そこには純粋性がある。そこには，献身がある。そういっても，よいかとおもう。わたくしがカザノーヴァの女に対する態度に崇高なものさえ感ぜられるといっても，かならずしも，いいすぎとはならないのではなかろうか。

かれが肉体の交渉をもった女性はおびただしい数にのぼる。「回想録」の中で，かれの生涯の40年間にかれがその名をしるしたものだけでも，その数116にのぼる。もっともそれに対して，つぎのごとくいうひともある。「そうだとすると，いつもヨーロッパを旅行ばかりして，あらゆる民族とあらゆる階級の何千人という人間に出遇い「わたくしは女性のためにうまれたような気がする」と告白した1人の独身男にしては1年間の恋人が3人たらずという結果になる」と[4]。もちろん，このひとは，おんなたらしの名をほしいままにしたカザノーヴァとしては，むしろすくなきに失しているのではないかといおうとするもののごとくである。そういえば，西鶴の「一代男」世之助の場合は，3,742人，在原の業平の場合は3,333人といいつたえられている。——これは，野間光辰教授の教示にあづかったところである。京都大学構内でであいがしらにおたづねしたのに，ひびきのものに応ずるがごとく，即座に御回答をかたじけなくしたのには，感謝の念もさることながら，畏敬の念あらたなるをおぼえずにはいられなかったものである。——それにくらべれば，カザノーヴァの相手の116

4) *Ibid.*, p. vii, 小松太郎氏訳，同上，12頁。もちろん，ここで40年という場合，それは，1734—1774年間をさすはずである。1774年は「回想録」が，ここできれているから当然であるが，1734年は，カザノーヴァがはじめて性にめざめた年である。

人は，むしろ，そのすくないことをこそ，おどろくべきであるかもしれぬ。しかしながら，業平の3,333人は単なるいいつたえである。信憑性を欠くきらいなしとしない。世之助の3,742人にいたっては，いうまでもなく，つくりばなしである。現実のことではない。現実に40年に116人といえば，しかしながら，かならずしも，すくないとは，いえないのではなかろうか。すくなくとも，常人からみれば，おびただしい数というを，はばからないのではなかろうか。それに，名をあげないものは，この中にふくまれていないわけである。そのなかには，たとえば，女工6・7人[5]，あるいは，女工20人[6]，と，いうように，十把一からげにあつかわれているような場合さえある。だと，すると，その数はふえるばかりである。それだけに，その数は，かならずしも，すくなくはないはずである。

なんだかはなしが妙な方にすすみすぎたきらいがある。もとにもどろう。

わたくしのいいたかったのは，かれが肉体の交渉をもった女性のおびただしい数にのぼるということそれ自体ではない。そうではなくて，それがそのようにおびただしい数にのぼるにもかかわらず，かれにうらみをいだく女性がほとんど，いなかったということである。すくなくとも，そういう女性がほとんどみあたらない，と，いうことである。いな，それどころではない。みな，カザノーヴァに好意をもった。そのため，わかれるのには，くろうをした。そのようにおもわれる。そのことである。すくなくとも，再会する場合，ほとんど，いづれも，それをよろこんでいる。そういっても過言ではない。そのことである。そして，そのことは，カザノーヴァの女性に対する態度がいかに純粋であるかをものがたる。いかに献身的であるかをものがたる。ものがたってあまりがある。そういえるのではなかろうか。まことに，かれの女に対する態度には崇高なものが感じられる。それは，ある意味においては，騎士道に通じる。そういってもよい。そうおもわれるほどである。そういえば，いいすぎになるであろ

5) *Mémoires*, V, ii, pp. 45–50.
6) *Ibid.*, III, xvii, p. 418, xviii, p. 431.

うか。あるいは，それは，すこし，いいすぎになるかもしれない。いな，すこし，どころではない。はなはだしいいいすぎになる。そういうことになるようでさえある。カザノーヴァの女におけるや，好色のそしりはまぬがれない。いな，漁色の非難にさえ値する。そうもいえるであろう。それはいなむことができない。もとより，聖人，君子の道からはなれること，きわめて，大なるものがある。わたくしといえども，それをいなむものではない。女性に対する純粋献身，それは1人の女性に対してささげられてこそ，とうといのではないか。すくなくとも，そのすぐれたるには，しかないのではないか。そういえば，そのとおりである。それは，いうまでもないところである。しかしながら，世の中は，そういう聖人，君子ばかりでなりたっているのではない。いな，それどころではない。実は，女がきらいなわけではない。いな，非常にすきである。そのくせ，女性えのおくりもの1つするにも，財布をにぎって思案する。他人のおもわくを気にする。すぐ体面をかんがえる。とるにもたらぬ地位をおもう。そして，しりごみをする。それで女性にすかれない。そこで，やむを得ず，品行方正ということになる。そういったてあいがうようよしている。そういうてあいにかぎって，カザノーヴァを非難することである。だが，かれらに比すれば，非難されるカザノーヴァの方が，むしろ，すぐれている。りっぱである。みあげたものである。そういっても，異議をとなえるひとはあるまい。かれらに，すくなくとも，かれらに，カザノーヴァのおんなたらしをけなす資格はあるまい。かれらに，カザノーヴァを背倫よばわりする権利はないはずである。かれらが，もし，それにもかかわらず，あえて，それをなすならば，わたくしは，かれらにといたい。「すべて色情を懐(いだ)きて女を見るものは，既に心のうち姦淫したるなり」[7]というおしえを，なんときくか，と。そして，いいたい。「なんぢらの中(うち)，罪なきものまづ石を擲(なげ)うて」[8]と。

閑話休題。それにもかかわらず，カザノーヴァは，おんなたらしである。そ

7) 新約聖書，マタイ伝，第5章28節。
8) 同上，ヨハネ伝，第8章第7節。

れも，女にみつぐ方の型に属する。しかも，その雄なるものである。それだけに，かれには金がいる。それでは，かれは，その金を，どうくめんしたか。それについては，三つの道を指摘することができる。一つは，さきにも，ちょっと，ふれた，ムッシュー・ブラガダンからの援助である。つぎは，マダム・デュルフェ (Mme D'Urfé) よりのそれである。そして，最後に，しかしながら，その重要さにおいては，おそらく，前二者にまさるともおとらぬといってよいとおもわれるもの，すなわち，ギャンブリングである。1と2は，もと，かれの一つの特技であるところの託宣 (oracle) によるものである。かれには，この特技があった。そして，それをたくみに利用して人心を籠絡した。わたくしが，第一のカザノーヴァの要素の中にペテン師，いかさま師をかぞえておいた所以である。ムッシュー・ブラガダンとマダム・デュルフェからの援助も，また，これによって，かれらを籠絡・瞞着，もって，自家薬籠中のものとなすことによって，確保したものである。もっとも，マダム・デュルフェの援助は，いま，われわれの問題としている時期には，まだ，みられない。これらの援助は，かれらの生涯にとってきわめて重大な意義がある。それを否定することはできない。しかしながら，カザノーヴァのように惜みなく女にみつぐためには，それだけではたりなかった。と，いうよりも，多々益弁ず，と，いうべきであろうか。いづれにしても，かくて，かれは，ギャンブリングによって，大にもうけ，大に散じることになる。それは，事実である。厳たる事実である。かれは，いたるところでギャンブリングをやっている。たれとでもギャンブリングをやっている。まさに，かけごとしとよぶをはばからない。優にそのみちのくろうとといってよい。したがって，ギャンブリングには精通していたはずである。すくなくとも，この方面に関するかぎりは，人心の機微に通じていたはずである。ギャンブリングは，まさに，おてのものであったはずである。そういっても，かならずしも，いいすぎとはなるまい。事情かくのごとくである。だから，ギャンブリングの世界は，かれにとっては，ホーム・グラウンドといえよう。そのホーム・グラウンドが，いまや，かれの活躍の舞台となるのである。かれの得意

やおもうべし，と，いうべきところでなければならない。

かくて，かれは，さきにみたデュヴェルネーとの会見後，その感想をつぎのごとくしるす。

わたくしは約束をまもることができるとおもった。そして，そうおもうと，わたくしは，とても，うれしくてたまらなくなった[9]。

しかしながら，実は，そうてばなしでよろこぶのは，まだ，はやすぎるのである。というのは，こうである。なるほど，かれは，ギャンブリングに精通しているであろう。そのみちのくろうとでもあろう。そして，ロッテリーは，ギャンブリングの1種である。それにちがいはない。しかしながら，逆にギャンブリングは，かならずしも，ロッテリーではない。したがって，ギャンブリングに精通していることは一つのことである。ロッテリーに精通していることは他のことである。そういうことになる。もとより，かれはロッテリーについて全然しらないわけではないであろう。いや，おそらく，しっていたであろう。なにほどかの知識はそなえていたであろう。すくなくとも，普通人がそれについてもっているほどの知識のもちあわせは；かれにも，あったであろう。そうかんがえてよかろう[10]。いな，そう，かんがえなければならないであろう。そうでなければ，さきにみたようなデュヴェルネーとの会話の進行はあり得ないはずでなければならない。そういっても，よいであろう。しかし，それにしても，それ以上，はたして，どれだけ，ロッテリーについてくわしくしるところがあったのであろうか。それは疑問の存するところでなければならない。いな，大きな疑問の存するところでなければならない。そういわねばならない。すくなくとも，わたくしは，そういいたい。なぜか。こうである。

まづ，カザノーヴァは，かけごとしである。それは，これまで，くりかえし述べてきたところのごとくである。口がすっぱくなるほど述べてきたところのごとくである。しかしながら，かれのこのんでやったかけは，カードによるも

9) *Mémoires*, III, ix, p. 190.
10) 本稿，Ⅱ，木誌，96巻2号，1965.

のである。ファラオン(pharaon)などいうことばが，よくつかわれたようである。したがって，カザノーヴァはギャンブラーである，と，いうことは，かならずしも，かれがロッテリーのくろうとである，と，いうことにはならない。そういわねばならない。かれがギャンブリングにくわしいということは，かれがロッテリーにくわしいということには，ならない。そうかんがえねばならない。しかも，ただ，それだけに，とどまらない。われわれは，さらに，すすんで，いうことができる。かれは，ロッテリーについては，くろうとではない，くわしくもない，そもそも，これまで，あまり，それになじんでいたとは，かんがえられない，と。そして，それは，われわれがこれまでみてきたところを回想すれば，すぐ，わかることで，なければならない。

まづ，かれは，ベルニ氏をたずねた。そして，そのとき，ベルニ氏から「王室の収入に役にたつことを考案しなさい」といわれた。そこで，かれは，それについてかんがえた。しかるにかれが，「いくらあたまをしぼってみても，あたまにうかぶのは，いろいろの新税という，にくらしい，たわけた，策だけ」であった。そして，ついにロッテリーに想到するに，いたらなかった[11]。そのことは，かれがロッテリーになじむことなく，したがって，また，それについて，くわしくなかったことをものがたるものでなければならないであろう。

つぎに，かれはブーローニュ財務総監をおとづれた。そして，デュヴェルネーの軍官学校のための金2,000円調達の良案をもとめられた。それに対して，かれは「わたくしの胸中には一策があります」といった。そして，かれが述べるところをきいていると，どうしても，それはロッテリーであるとしかかんがえられない。そういっても，よいであろう。げんに，デュヴェルネーはカザノーヴァにむかって，「あなたのかんがえていることは，わかりました」といい，さらに，「明日御来駕の栄をたまわれないでしょうか。わたくしは，あなたに，あなたの御企図をお示しいたしましょう」といった。そして，翌日カザノーヴァがかれをたずねて行くと，ロッテリーの企画書を示して，「カザノーヴァさ

11) 同上，96巻1号，1965.

ん，あなたの策というのは，これでしょう」といった。それにもかかわらず，カザノーヴァは，そういわれるまで，じぶんでは，まだ，ロッテリーに想到するにいたらなかった。その証拠には，前日ブーローニュの家を辞したときは，チュイルリーを逍遙しながら，「わたくしは1億調達してみせるといばる。その実，成算はすこしもない」と，しょげている。そして，明日，「もし，かれがわたくしの口を割らそうとすれば，わたしは，さけることができる」と，みづからをなぐさめている。また，場合によっては，「神秘的な沈黙という手を使かおう」と，みづからにいいきかせてもいる。そして，翌日，デュヴェルネーから，ロッテリーの企画書を見せられるにおよんで，はじめて，「たしかに，わたくしの策というのは，これにちがいありません」といっている[12]。

このことも，また，カザノーヴァが，いかに，ロッテリーになじみがうすかったかをものがたるものでなければならない。そして，それほどなじみがうすいということは，やがて，それについてくわしくないということを意味せねばならない。かくて，かれは，すくなくとも，ことロッテリーに関するかぎり，くろうとではなかった。そういってもよいであろう。

しかるに，この場合，ロッテリーは，いわゆるナンバー・ロッテリーである。そのことは，すでに，あきらかにしたるところのごとくである。そして，ナンバー・ロッテリーは，いろいろの問題をふくむ。したがって，その起案，経営は，かならずしも，そう，簡単・容易なものではない。それは高度の専門的知識の素養を必要とする。いくら，それが，ギャンブリングの1種であるからといって，ただ，それだけでは，どうにもならないはずである。そのことも，すでに述べたるところよりして，あきらかなところであろう。ことに，それには，危険がともなう。経営者の方が，逆に，莫大な損失をこうむるおそれなしとしないということが，それである。したがって，ロッテリーの実施に対しては，異論がすくなくない。したがって，また，それを反駁し，反対者を説得することが必要となる。ところが，それは，かならずしも，容易なわざではない。それな

12) 同上，96巻2号，1965.

ればこそ，すでに，はやく，カルサビギ氏より，それの企画書が出ているにもかかわらず，それが日の目をみるにいたらなかったのではなかったか。したがって，これを実施するためには，まづ，損失の危険のないことの論証・収益の確実であることの論証が必要となる。そして，それは確率論によらねばならない。しかるに，それは数学の高度・精確なる知識なくしては不可能である。こうみてくると，いくらカザノーヴァが，ギャンブラーのくろうとであるからといって，ただ，それだけでは，すまないことになる。かくて，ロッテリーというかれの活躍の舞台への道はけわしい。この道は，すくなくとも，かれにとっては，「いつか来た道」ではあるまい。この道は，すくなくとも，かれにとっては，坦々砥のごとき道ではないはずである。それは，すくなくとも，かれにとっては，いばらの道でさえあろう。

それではカザノーヴァは，いかにして，そのけわしい道をのりこえることができたか。われわれは，まづ，それから，うかがわねばならない。わたくしは，これから，しばらく，それについて，うかがうところあるであろう。

まづ第一にあげられねばならないことは，かれがカルサビギ兄弟と手をにぎることができたということでなければならないであろう。ここにカルサビギ兄弟というのは，さきにみたカルサビギの案というのは，実は，かれ (Giovanni Calsabigi) の弟の手になるものにほかならないからである。この弟は，くわしくは，ラニエル・シモーヌ・フランセスコ・カルサビギ (Raniero Simone Francesco Calsabigi) といい，1714年レグホルン(Leghorn)にうまれ，幼にして，すでに穎悟。とくに，詩人と財政家という二つの面において，その俊秀ぶりを示した[13]。いま，カザノーヴァのしるすところを引けば，つぎのごとくである。

かれは外観はあまり感じのよくないひとであった。というのは，かれは1種の癩病にかかっており，それが全身をおおっていたからである。しかし，それは，かれが，大いに，たべ，書き，かつ，あらゆる肉体的・精神的機能を完全に行使することを，さまたげなかった。かれは非常に快活に談論した。

13) Paul Nettl, *The Other Casanova*, New York, 1950, pp. 152-154.

かれは，ひとまえに，そのすがたをみせなかった。それは，病気のためにみにくくなったからばかりでは，なかった。かれは，ときに，しばしば，からだのあちこちを，かかずにはおれなかった。ところが，パリでは，からだをかくということは，いとわしいこと，と，せられていた。それで，からだをかくことが，ほんとに，そうせずにはおれなかったのか，それとも，単なる習慣であったのかは，しらない，ともかく，かれは，社交のもたらすたのしみよりも，つめをじゆうにうごかすさいわいの方をえらんだのである。かれは，このんで，こういった。「わたくしは，神と神のつくりたまうものを信ずる。そして，わたくしはおもはずにはいられない。神がわたくしに爪をたまうたのは，わが身をやく嗔恚のほむらにつつまれていて感じられるただひとつのなぐさめを得るために利用するためにだけである」と。

……

……わたくしには，すぐ，かれが非常にエスプリーに富むひとであることが，わかった。かれは長男で独身で，すぐれた数学者で，財政の運営に精通しており，あらゆる国々の商業に通暁しており，歴史の造詣深く，才人であり，詩人であり，色をこのむことはなはだしいひとであった (Il était laîné et célibataire, grand calculateur, versé dans les opérations de finances, connaissant le commerce de toutes les nations, docte en histoire, bel esprit, poëte et grand ami des femmes)。かれはリブルヌ(Livourne)の産。ネープルの官庁に勤務したことがあり，ホスピタル氏(M. de l'Hospital) とともにパリ来住。かれの弟は，亦，才腕，学識がある。しかしながら，兄に一疇を輸する[14]。

そして，かれの弟の方のカルサビギがカザノーヴァにかたるところによれば，かれら兄弟は，2年前から，かれらのロッテリーの計画を成功させるために千辛万苦をはらってきたものである[15]。かれらは，それについて，研究した。

14) *Mémoires*, III, ix, pp. 192-193.
15) *Ibid.*, p. 192.

そしてくわしいデータをもっていた。かれらは，それをもって，デュヴェルネー氏に説いた。デュヴェルネー氏が，「カザノーヴァさん。あなたの策というのは，これでしょう」といって，ロッテリーの企画を示し，また，「この企画はカルサビギさんの手になるものです」といったわけである。しかしながら，カルサビギ氏も，カザノーヴァにいっているように，「むくいられるところは，くだらない反対論であった」[16]。かくて，カルサビギ兄弟のせっかくの案も，むなしく高閣につかねられて，日の目をみるにいたらなかったのである。

それでは，それだけの研究・資料にもとづく企画がどうしてデュヴェルネーによって実行にうつされるにいたらなかったのであろうか。そういう疑問が生ずるのはふしぎではあるまい。げんに，カザノーヴァも，デュヴェルネーに対して，おなじ疑問を発している。それは，われわれのすでにみたところのごとくである[17]。そして，それは，主として，この種のロッテリーが危険をともなうからである。経営者がかえって莫大な損失をこうむるおそれがない，と，いえないからである。すくなくとも，そのおそれがあるからである。そのことも，われわれのすでにあきらかにしたところのごとくである[18]。そして，カルサビギ氏は，それらの反対論を「くだらぬ反対論」とかたづけている。それは，いま，みたところのごとくである。それなら，かれは，それを反駁して反対者を折伏すればよいわけである。しかしながら，かれにはそれができなかったわけである。かれにはそうするだけの能力がなかったわけである。兄の方が出てくれば，あるいは，それができたかもしれない。兄には，それだけの能力はあったのではないかともおもわれる。だが，兄が出たとしても，はたして，そううまく問屋がおろしてくれたであろうか。それは，かならずしも，断言のかぎりではあるまい。けだし，学理をきわめる能力は一つのものである。ひとを説得する能力は，それとはことなるものである。それだからである。しかし，いづれにしても，兄は出てこなかった。そして，それは，兄の事情にもとづく。それは，

16) *Ibid.*
17) 本稿，Ⅱ，本誌，96巻2号，1965.
18) 同上。

われわれのすでにしるところのごとくである。そして，デュヴェルネー氏をうごかすことは，できなかった。それも，われわれの，すでに，しるところのごとくである。そこえ，わがカザノーヴァが登場した。そして，かれらの企画とほとんどおなじものをもって，——というよりも，実は，かれらの企画に便乗してというべきは，すでにみたところによってあきらかなところのごとくである——デュヴェルネーに説いた。するとデュヴェルネーの意大いにうごいた。そして，それに，かたむいた。かれらとしては，とびにあぶらげをさらわれるかっこうになった。うかうかしてはいられないということになった。そこで，カルサビギ氏よりカザノーヴァに対して，提携の申し出が出されることになった。そういう次第である。そして，その申し出は，いま，カザノーヴァのしるすところによれば，つぎのごとくである。

カザノーヴァとデュヴェルネー氏の会談の直後，カルサビギ氏は，友情をこめてカザノーヴァの手をにぎり，いっしょにやりたい，と申し出る。それに対してカザノーヴァは，そうできれば，まことにありがたい，とこたえる。そして，それから3日たって，カルサビギ氏は，カザノーヴァをたずねてくる。そして，ぜひじぶんのとこえ，たづねてきてくれ，そして，兄に会ってくれ，と，いう。カザノーヴァはそれを快諾する[19]。そして，その兄に会う。兄はカザノーヴァに，かれのたくさんのかきもの (un tas d'écriture) をみせる。それは，かれのロッテリーのあらゆる問題を解決したものである。そして，カザノーヴァにいう。

——もし，あなたが，わたくしの援助なしに，すべてやってゆけるとおかんがえでしたら，それは結構なことです。しかし，それは，あなたのうぬぼれというものです。できっこありませんよ。そのわけは，もし，あなたに実際の経験がなく，かつ，また，もし，あなたにしごとになれたひとがいなければ，あなたの理論はまにあわないことになるでしょう。それだからです。勅令 (décret) が発布された場合，あなたは，いったい，いかがせられます

19) *Mémoires*, III, ix, pp. 191-192.

か。あなたが会議で (au conseil) 発言なさるとき，もし，あなたがわたくしを御信頼なさるおつもりならば，一定の期限をつけ，それ以後は，一切責任を負わないようにしなさい。いいかえれば，その以後は，参与しないといっておどすことです。そうしなければ，こせこせした，そして，好機をねらってぐずぐずのばすやからが，きっと，あらわれて，1日のばしにひきのばし，延引に延引をかさねて，あなたを無期延期に (aux calendes grecques) におとしいれることでしょう。他方では，デュヴェルネー氏は，われわれが提携したのをみれば，きっと，非常に，安心しましょう。すべてのシャンスにおけるもうけの等一性の分析の件に関しては (quant aux rapports analytiques des gains égaux dans toutes les chances)，わたくしは，あなたに，カテルヌ (quaterne—quaterno, 4つの数の組み合わせ) においては，かんがうべからざることである，と，いうことを，なっとくしていただきたい，と，そう期待しています[20]。

これに対して，カザノーヴァのかんがえは，どうであったであろうか。もちろん，それは，かれにとっては，それこそ，ねがったり，かなったりというところであった。こころみに，いま，かれのいうところを，「回想録」より引けば，それは，つぎのごとくである。

わたくしは，このひとたちと提携することを熱望した。それには，大きな理由があった，その理由というのは，わたくしは，かれらなくしては，やって行くことができない，と，いうことであった。しかしながら，わたくしは，それをかれらにけどられないように，用心した[21]。

これによってみても，カザノーヴァのロッテリーの世界での活躍が，いかに，カルザビギとの提携に負うところあるかは，あきらかであろう。これがなければ，かれのロッテリーの舞台での活躍が中道にして挫折しなかったとは，たれがこれを断言することができようか。いな，それどころではない。ロッテリー

20) *Ibid.*, pp. 193–194.
21) *Ibid.*, p. 194.

が実現するためには，軍官学校の会議において可決せられることが必要であったのである。しかし，カルサビギの協力・援助なくして，はたして，それに成功することができたであろうか。それさえ，あやうかったのではあるまいか。すくなくとも，カザノーヴァ自身は，会議の前夜，カルザビギより，その貴重な研究資料をおくられて，こう述懐している。

運命の神はわたくしを成功させる役目を買って出てくれたようにみえる。なぜなら，この表は天からの祝福のごとくわたくしのところにやって来たから。ゆえにこの至福の計画にしたがうことをかたく決意し，また，この教示に意をつよくして——カルザビギから教示をうけたことはなんでもなかったふりを，つとめて，よそおうて——，わたくしは，軍官学校におもむいた[22]。

これをみると，軍官学校における会議において，反対論者を説き伏せるのにカルサビギの協力・援助がいかに大きな役割を演じたかは，おもいなかばにすぎるものあるをしらないわけにはゆかないであろう。

かくて，われわれは，カザノーヴァの，ロッテリーの舞台上での活躍が，カルサビギ兄弟との提携に負うことのいかに大なるものがあったかを，みとめなければならない。

つぎに，それでは，カルサビギ氏の企画をみてさえ，それを採用することにふみきることのできなかったデュヴェルネー氏が，カザノーヴァに説かれると，ふみきるにいたったのは，なぜであろうか。ちょっとかんがえると，ふしぎな気がするはずである。なんとなれば，カルサビギ氏兄弟はその道のくろうと，いってもよいひとたちである。その企画はりっぱなはずのものである。そうかんがえてもよいものである。それに，うらづけとなる研究資料も豊富である。それは，いまみたところのごとくである。それにくらべると，カザノーヴァの方は，なんといっても，そのみちではしろうとである。そういわなければならない。うらづけの研究資料のもちあわせもない。それは，いうまでもな

22) *Ibid.*, p. 197.

いところである。それどころか，デュヴェルネーからいわれるまで ロッテリーなど，頭になかったのである。そのことは，われわれのすでにしるすところのごとくである。しかるに，前者がうごかすことができずして後者がうごかすことができたというのは，いったい，どうしたことであろうか。これがふしぎでなくて，いったい，何がふしぎであろうか。そういいたいところである。しかし，いくら，ふしぎだといっても，それは，事実なのである。事実は，あくまで，事実である。いかんとも，しがたい事実なのである。それでは，それは，なにゆえそうなのであろうか。

まづ，かんがえられることは，カザノーヴァの説得の妙ということであろう。そして，そうかんがえてみると，なるほど，それもそうかという気がする。いな，それにちがいない，と，さえおもわれぬでもない。と，いうのは，こうである。カザノーヴァは，かけごとしである。ペテン師である。それは，われわれの，すでに，しるところのごとくである。かけごとしはかけひきがうまい。かけひきに長じている。かけひきはおてのものである。また，それでなければかけごとしはたってゆかれぬ。それはかけごとしの生命である。だから，そうあるのがあたりまえである。それだからである。また，ペテン師はひとを信じこませることに妙を得ている。ひとを信じこませることがたくみである。ひとを信じこませることは易々たることである。また，それができなければペテン師はあがったりである。それは，ペテン師にとって，たのみのつなである。だから，そうでなかったら，かれはペテン師ではあり得ない。それだからである。そこえもってきて，カザノーヴァは，はったりの名人である。かれは財務総監ブローニュをたづねるとき，せめて財政事務に関する陰語さえしっていたならと，残念がった。そのことは，われわれの記憶に，いまだあらたなるところであろう[23]。陰語の知識さえあれば，後はなんとでもやって行けるというわけである。陰語一つで相手をけむにまいてしまおうというわけである。まさに，おどろくにたえたるはったりや，というべきである。カザノーヴァが，これらの武器を

23) 本稿，I，本誌，96巻2号，1965.

遺憾なく利用して，デュヴェルネー氏に説いたであろうことは想像にかたくないところでなければならない，そこで，さすがのデュヴェルネー氏も，ために意大にうごいたとしても，それは，無理ではあるまい。そうかんがえることはできるはずでなければならないであろう。

げんに，わたくしは，かれの説得力がいかに大であったかを証するに足る事実をあげることができる。

たとえば，カザノーヴァがデュヴェルネー氏等とロッテリーについて論じあった3日後，カルサビギは，カザノーヴァをたづねてきて，カザノーヴァにむかって，つぎのようにいっている。「あなたはきびしい論法で，あのひとたちをやっつけました。もし，あなたが財務総監におねがいになれば，われわれは，きっと，ロッテリーを設立することができましょう」[24]と。

カルサビギは，カザノーヴァに対して，また，こうも，いっている。「わたくしたちは，この2年もかかって，この計画を成功させるために千辛万苦してきました。そして得たものは，くだらない反対でした。その反対を，あなたは，あっという間に粉砕してしまわれました」（……vous avez pulvérisées en moins de rien……）と[25]。

その翌日は，カザノーヴァは，ヴェルサイユで，財務総監のブーローニュ氏に会った。そのとき，ブーローニュ氏は，カザノーヴァに，こういっている。「あなたは，フランス一のあたまのよいひとの1人と，みんなにおもわれているデュヴェルネー氏を，驚嘆させました。……ところで，ロッテリーは設立せられますよ。そして，それは，あなたのおかげですよ。わたくしは，それを保証することができます」と[26]。

しかしながら，そうはいうものの，さらに，ひるがえって，かんがえてみるに，デュヴェルネー氏とても，ただものではあるまい。フランス当時における

24) *Mémoires*, III, ix, p. 191.
25) *Ibid.*, p. 192.
26) *Ibid.*, p. 194.

いわゆる大物の1人である。そのことは，いまみたブーローニュのことばでもあきらかなところである。そうやすやすと，ひとに乗じられるほど迂闊なひとであるとも，おもえない。そううまうまと，はったりをくわされるほどおひとよしのひとであるとも，かんがえられない。そうもいえるかもしれない。それに対しては，もとより，カザノーヴァのちからにデュヴェルネーのそれをうわまわるものがあったのである，と，いえるかもしれない，そういってしまえばそれぎりである。そして，あるいは，ほんとうに，そうであったのかもしれない。しかしながら，それにしても，この場合，さらに，そればかりではなくて，そのほかに，さらに，他の事情もあったのではないか。そうかんがえてみることも，かならずしも，ゆるされないわけではないのではなかろうか。そこで，そうかんがえてみる。そして，それをさぐってみる。すると，ある。たしかにある。それは，ほかでもない。カザノーヴァには有力なるうしろだてがある，と，いうことである。これが，この際大にものをいったものである。そうかんがえられる。なぜ，そうかんがえられるか。それはこうである。この場合ロッテリーは国立（ロワイヤル）でなければならない。そういうのが，カザノーヴァの主張であり，また，カルサビギの意見でもあった。そのことは，われわれのすでにみたところのごとくである[27]。そして，両者の意見がこう一致してみると，デュヴェルネー氏といえども，それがそうあらねばならぬとかんがえるにいたったことであろう。そう推測しても，さしつかえあるまい。しかるに，国立ということになると，王室，政府，要路の大宮，いわゆる有力者・実力者をうごかすことが要請せられる。それはみやすいところでなければならない。ことに，この場合，ロッテリーには反対論がすくなくない。そうすれば，この要請はそれだけ大でなければならない。そういうことになるであろう。かくてヴェルサイユにつながりがあることが必要となるであろう。すくなくとも，それがのぞましいことになるであろう。ところが，カルサビギ兄弟には，それがなかった。すくなくとも，それがあったかとかんがえしむるに足るなにものも，みあたらないよう

27) 本稿，Ⅱ，本誌，96巻2号，1965.

である。それどころか，こういうことさえある。わたくしは，すこしまえに，カルサビギがカザノーヴァをたづねて来たことについて述べたことがある。実は，そのときのことなのである。そのとき，カザノーヴァにベルニ氏から手紙が来た。それには，明日ヴェルサイユにみえればポンパヅール夫人 (Mme la Marquise de Pompadour) に紹介してあげる，また，そこでブーローニュ氏にも会える，と，あった。カザノーヴァは僥倖に驚喜し，みえからよりも，むしろかけひきから，その手紙をカルサビギ氏に見せた。そして，カルサビギ氏は，それをよんで目を皿のようにした (il ouvrait de grands yeux en le parcourant)。そして，カザノーヴァにむかって，こういった。「あなたはデュヴェルネー氏にあなたのロッテリーを採用せしめるに必要なものを，すべて，もっておられる」[28] と。そして，このエピソードは，たまたま，もって，この場合うしろだてがいかに重大な意義をもつかを示すとともに，またカルサビギ兄弟が，それをもたぬことをも示すものとなすにたるであろう。

しかしながら，たとい カルサビギ兄弟にうしろだてがないとしても，デュヴェルネー氏にあれば，それでよい，と，いうことになるであろう。そして，デュヴェルネー氏は，かれ自身フランス当時の大物の1人ではないか。げんに，財務総監ブーローニュのごとき，口をきわめて，「かれの財政手腕を大にたたえ」ているくらいではないか[29]。しかし，そういうかげのちからは，いくらあってもよい。ありすぎてこまるということはない理である。それに，「高木風強し」という。大物であればあるだけに，それだけ敵も多いということも，かんがえられよう。さきに引いたところにもみられるごとく[30]，かれは，ローのために配流の身をかこたねばならなかった。フルーリーの施政時代には幽囚のうきめをなめさせられさえしている。それなれば，なおさらのことである。うしろだて・縁故・かげのちからといったものをもとめることひと一倍切なるものがあったであろう。そうかんがえてよいであろう。それに，デュヴェルネー氏は，

28) *Mémoires*, III, ix, pp. 191-192.
29) 本稿，I，本誌，96巻2号，1965.
30) 同上。

それほど，そういったものに，めぐまれてはいなかったのではないか。どうも，そうおもわれるふしもないではないようである。そうおもわれぬでもない。と，いうのは，こういうこともあったからである。わたくしは，さきに，ボーマルシェーが「デュヴェルネー氏によって，一躍，財政事務にたづさわらせられ，産をなすにいたった」ことをのべたことがある[31]。ところがあれは，つぎのような事情によったものである。すなわち，1760年ルイ一五世の姫たちのハープの教師となったボーマルシェーは，ルイ一五世に説いてデュヴェルネーが設立した軍官学校を視察させた(8月18日)。その報酬として，デュヴェルネーはボーマルシェーに財政の事務にもたずさわらせることとなったのである。その結果，ボーマルシェーはデュヴェルネーとくんで，産をなし，産によって貴族の地位を獲得するにいたったのである[32]。だから，当時にあっては，ボーマルシェーはまだ，一介の白面の青年にすぎなかったのである。そのかれを通じて，デュヴェルネー氏はルイ一五世の軍官学校視察の栄を得たわけである。このことは，かれが，そういった方面に，縁故がうすかったことをうかがわしむるものとなすに足らないであろうか。そればかりではない。デュヴェルネー氏のような位置にあるものは，とかく，そのような縁故を重大視しがちである。そうかんがえられる。そうかんがえてみると，おもいだされることがある。それは，さきに，カザノーヴァが，はじめて，デュヴェルネー氏をたづねて行ったときの状景である。あのとき，座には7・8人の客がいた。デュヴェルネー氏は，みんなに，カザノーヴァを，外務大臣ならびに財務総監の友人といって紹介した。そうカザノーヴァはしるしている[33]。それは，当時の儀礼であったのかもしれない。しかし，カザノーヴァがわざわざそうしるしているのは，それが，よほど印象ぶかかったからではなかろうか。そして，それがよほど印象ぶかかったということは，それが，世の常の儀礼以上に感じられたからではなかろうか。はたして，そうかえんがえることは，ゆるされないものであろうか。もし，そうかん

31) 同上，96巻1号，1965.
32) 辰野隆博士「ボーマルシェーとフランス革命」48-49頁。
33) 本稿，Ⅰ，本誌，96巻2号，1965.

がえることがゆるされるものとすれば，デュヴェルネー氏が，そういう縁故を重大視する心理が，そこに，ひそんでいたとかんがえることも，また，ゆるされるところでなければならないであろう。そして，そうかんがえることがゆるされるならば，さらに，また，かれがそういった縁故に，かならずしも，めぐまれていなかった，と，かんがえることも，また，ゆるされてよい。そうかんがえてもよいのではなかろうか。そして，そうかんがえてみると，なるほどとうなづくことができるであろう。カザノーヴァの背後には大きなうしろだてがある。つよい縁故がある。すなわち，ベルニ氏がひかえている。ショアズール公がついている。そして，そのことはやがて，当時宮廷にあって飛ぶ鳥をもおとす勢のあったポンパヅール夫人に容易につながることをかんがえさせる——事実，この，後，すぐ，カザノーヴァはポンパヅール夫人にまみえている。

以上，これを要すれば，つぎのごとくなるであろう。

ロッテリーは，すでに，カルサビギ兄弟によってその周匝緻密な企画が，デュヴェルネーのてもとまで，でていた。しかし，それには反対論があった。カルサビギはそれを充分に論破することができなかった。それにくわえて，この企画は，国立でなければならなかった。そのためには，宮廷方面をうごかすちからがなければならなかった。ところが，カルサビギには，それがなかった。デュヴェルネーにも，それが充分にあるとは，おもわれなかった。そこに，わがカザノーヴァが登場した。かれは，もちまえの説得力で，反対論をみごとに粉砕する能力をしめした。しかも，かれには，有力なうしろだてがあった。そこで，デュヴェルネーは，いよいよ，この企画を実現しようと決意した。しかしながら，さて，いよいよ，実施となると，カザノーヴァの知識，経験では不充分である。第一，軍官学校における会議の席上で専問家を説得することが問題である。つぎに，実際上の組織運営が，これまた，なまやさしいものではない。口舌でひとをけむにまくだけではすまされない。ところが，さいわい，カルサビギ兄弟が提携をもうしこんできた。そこで，両者の共同により，上の難関を突破することに成功することになるのである。すなわち，まづ軍官学校におけ

る会議の席上で説得することに成功し，ついで，ロッテリー設立の勅令の発布を見，かくして，ロッテリーの設立，運営と，ことは順調に進行することになるのである。われわれは，順をおうて，それをながめるであろう。まづ，軍官学校における会議よりはじめるであろう。

軍官学校における会議（conseil）はカザノーヴァがデュヴェルネーをたづねて，ロッテリーについてはなしあった日からかぞえて，5日後に開催された。ついでながら，その間のカザノーヴァのうごきを摘記すれば，つぎのごとくである。——ただし，ここでは，ロッテリーとの関聯あるうごきにかぎることは，いうまでもない。——デュヴェルネーに会った3日後，カルサビギ兄弟を訪問。その翌日は早朝パリ発，ヴェルサイユに行き，ベルニ，ブーローニュと会談。さらに，ポンパヅール夫人に伺候。昼食後ヴェルサイユ発帰宅。デュヴェルネーより，明日11時軍官学校において会議開催の通知入手。同夜9時カルサビギよりのロッテリーの数式表落手。

さて，それでは，軍官学校における会議の模様は，いかにあったか。いま，しばらく，「回想録」にしるされたるところをひけば，つぎのごとくである。

わたくしが軍官学校につくと，すぐ会議（コンフェランス）がはじまった。……会議は3時間つづいた。

わたくしの，説明が半時間，その後，クルトウィユ氏（M. de Courteuil）が，わたくしのいったことを要約。ついで，反対論が2時間おこなわれた。わたくしは，それを反駁した。それは，きわめてたやすいことであった。わたくしは，かれらにいった。およそ計算の術が，まさしく，いくつかの関係の式からみちびき出される唯一の式を発見する術であるならば，それは，まさに，人間関係の式においても，すべて，数学の計算とおなじに，正確にあてはまる，と。わたくしはかれらを説得していった。この確実性がなければ，世の中に保険会社は存在しないであろう。ところが保険会社は，みな，もうかっている。みな，繁栄している。そして運命をあざわらい，運命をこわ

がるよわいあたまをあざわらっている，と。

わたくしは，最後にこのひとたち——その中の大部分は，決心がついていないようであった——に，こういった。賢明でありかつ，名誉あるひとびとにしてこのロッテリーの先頭に立ち，抽籤ごとにもうかるということに責任をとろうと申し出られる方は，いない。しからば，もし，大胆にも，その確実を主張するものがあらわれたならば，それらのひとびとは，そのものを，しめ出さねばならない。なんとなれば，かれは，かれらに，約束をまもらないことになるか，もし，約束をまもるとすれば，かれは，かたりであろうから。

これがきいた。その証拠に，たれひとり返答するものはいなかった。そこで，デュヴェルネー氏が立って，いった。いつでも廃止しようとおもえば廃止することができる，と。このことばをきいて，わたくしは，わがことなれり，とおもった。かくて，出席者一同，デュヴェルネー氏がさし出した議事録 (le procés-verbal) に署名して帰って行った。わたくしは，すぐ，デュヴェルネー氏にあいさつをした。かれは，したしみのある握手をしてくれた。そして，わたくしはかえった[34]。

かくて，難関の一つは突破した。1週間後 (huit jours après) に，待望の勅令が出た。かくて，ついに，ロッテリーの設立をみる。いよいよ，幕はあがる。カザノーヴァは舞台に登場する。そして，その活動が本格的にはじまる。われわれは，つぎに，それを，かれのしるすところにしたがって，ながめるであろう。

もちろん，カザノーヴァに対しては，事前に，管理人に任命・事務所 (bureau de recette) 6ヶ所の提供・うりあげについて年金4千フラン交付の内命があった。そして，かれは，もちろん，よろこんで，それを，受諾した。これは10

34) *Mémoires*, III, ix, pp. 197-198.

万フランの資本からの収入にあたる。かれは，事務所を放棄すれば，この資本を手にすることができるのである。なんとなれば，それは，かれとっては，保証人のかわりをなすものであるからである[35]。

カルサビギも，管理人に任命され，抽籤に年金4千フラン，さらに，モンマルトル通りのロッテリー署 (l'hôtel de la loterie) に大きい営業所 (le grand bureau de l'entreprise) をもらった。カルサビギ氏にあたえられた権益は，カザノーヴァにあたえられたものよりも，はるかに，大であった。しかしながら，カザノーヴァは，すこしも，うらやまなかった。それは，すべての権利は，もともと，カルサビギにあることを，かれはしっていたからである[36]。

カザノーヴァは，ただちに，6ヶ所の事務所の中，5ヶ所を，1ヶ所2千フランのわりで，うりはなち，サン・デニ街 (la rue Saint-Denis) の第6番目の事務所を，豪華にかざりたててひらいた。そしてそこに，じぶんの侍僕を，事務員 (commis) として，住みこませた。

第1回抽籤日がきまった。当りくじは，みな，中央ロッテリー署 (bureau général de la loterie) で，抽籤1週間後に，しはらう旨，公示された[37]。

カザノーヴァは，ひとつ，ひとにあまりまねのできないような・ひとめにつくこと (un relief) をやって，大衆をじぶんの事務所にひきつけてやろう，とおもった。そこで，かれは，かれの署名した当りくじは，みな，かれの事務所で抽籤の24時間後に，しはらわれる旨，公示した。それで券を買うひとは，かれのところに殺到した。そこで，かれのもうけは，非常にふえた。なぜなら，売り上げの6パーセントは，かれのものであったからである[38]。よその事務所の事務員約50人が，カルサビギのところえ行って不平をうったえて，かれに「カザノーヴァが，あんなことをするので，じぶんたちのうりあげが非常にへった」と，いった。しかしながら，この管理人は，「カザノーヴァをやっつけようとおもう

35) *Ibid.*, p. 198.
36) *Ibid.*
37) *Ibid.*, p. 199.
38) *Ibid.*

ならおまえたちも，やれるなら，カザノーヴァとおなじことをやりさえすればよいではないか」と，いって，かれらを，おいはらった[39]。

カザノーヴァの最初の収入は，4万フランであった。抽籤1時間後，かれの事務員が，かれのところに，帳簿を持参，1万7千フラン乃至1万8千フランしはらわねばならないことを，しめした。あたりくじは，みな，エクストレイ (les extraits) か，アンブ (les ambes) であった，カザノーヴァはその事務員に，しはらいに必要な資金をわたした[40]。

このやりかたは，かれの事務員をも幸福にした。なぜなら，もうけたひとは，いづれも，事務員にチップ (la pièce) をおいていったからである。カザノーヴァも，そこまでは，おもいおよばなかった。もちろん，カザノーヴァは，そんなもの，すこしも要求などしなかった[41]。

収入の総額は2百万であった。そして，管理人のもうけは，6千フランであった。パリだけでも，40万のうりあがげがあった。これは，第1回としては，まずは，上出来であった[42]。

抽籤の翌日は，カザノーヴァはカルサビギといっしょに，デュヴェルネー氏邸で会食した。カルサビギは，もうかりすぎてこまった，と，こぼした。それをきいて，カザノーヴァはよろこんだ。またカルサビギは，こうもいった。「カザノーヴァは，ちょっとあたまを，うまく，はたらかすだけで，年10万フランのもうけを確保した。しかし，そのために，ほかの管理人は，みな，損をした勘定になる」と。「わたくしも，おなじようなことを，よくやったものだ」とデュヴェルネー氏がいった。「そして，わたくしは，たいてい，うまくいった。それに，管理人は，いづれも，カザノーヴァ君をまねることが，できる。だから，それは，この，ロッテリーの声価をたかめるだけということもできる。そして，それはあなたのおかげであるとおなじく，カザノーヴァ君のおかげであ

39) *Ibid.*
40) *Ibid.*
41) *Ibid.*
42) *Ibid.*

る[43]」と。

ところで，第1回の抽籤が行なわれてみると，もうかったものがでる。かれらは，ロッテリーの評判をあをりたてることになる。巨額のものはいうまでもない。小額のものは，あたる率がたかい。当然その数は多い。額は小さくても，ロッテリーの評判えの寄与は，かならずしも，巨額のものにおよばぬとは，いいえない。かくて，「熱狂の嵐があれくるいはじめた。つぎの抽籤には，うりあげが倍増するであろうことは，容易に予見せられるところであった」[44]。

だから，カザノーヴァの行くところ，大家においても，また，劇場の暖爐の前においても，ひとは，かれをみかけしだい，かれに金を提供し，かれらにかわって，かれのよいとおもう券を買って，わたしてくれと，かれにたのんだ。それというのも，かれらは，ロッテリーを，まだ，充分には，のみこんでいなかったからである。そのため，カザノーヴァは，あらゆるかたの券，いいかえれば，あらゆる価格の券をいつも，携帯し，そしてめいめいに，よりどりをさせ，それで，毎晩，ポケットを金貨でふくらませて，帰宅したものである。この利益は莫大なものであった。だが，これはカザノーヴァだけにゆるされた一種の特権みたいなものであった。なんとなれば，他の管理人たちは，カザノーヴァみたいに，よいなかまもなく，かねもちでもなかった(ne roulaient point carrosse)からである。それは大都市における非常に有利な条件である。そこでは，個人の価値を，そのひとをとりまくかがやかしいもの (le brillant) によってきめることが，あまりにも一般的である。カザノーヴァの豪華は，どこでも，かれがはいることをゆるし，どこでも，かれに信用を享受させた[45]。（次回完結）

43) *Ibid.*, pp. 199-200.
44) *Ibid.*
45) *Ibid.*